

Computer Report

Vol. 50 No. 12 12月号 (通巻 675号)

はじめの言葉

■尖閣列島沖のビデオ情報の公開事件が、何となく沙汰済み気味というか、忘れられたかの雰囲気漂っている。ウィキリークスによる外交機密情報が次々とネット上に公開されるに至り、比較論的にビデオ情報などホットケという空気になってしまったのか。公開された当該ビデオ情報の持ち出しも内部の関係者によるものだったが、件のウィキリークスが保有している情報の大半が関係者による持ち出し情報である。

■情報管理論が俄に急浮上したが、その意味を大手マスコミは情報漏洩防止策だと短絡的に認識しているようだ。これが情報を専門に取り扱う我が国マスコミの情報処理感覚であり、センスだということか。ウィキリークス報道についても各国政府首脳の意見表明を単純客観報道に徹して垂れ流しするのみ。自らの主張も意見表明もできていない。そのくせ、ウィキリークスを世紀の大盗賊のような扱いぶりである。

■そこに飛び込んできたのが海老様をめぐる暴力事件である。天下太平国ニッポンのマスコミは連日の海老様報道に明け暮れている。暴行をしたという人物も特定でき、直ちに逮捕状まで用意しながら、いまだに身柄の確保が出来ていない。なんてことだろう。どういふ判断が働いているのか捜査一課まで乗り出しているというから、警察当局は重大事件であると認識をしているということか。今一度言わせていただく。「天下太平」である。

■人の噂も何とかで、すぐに忘れ去られるものだと言えればそれまでだが、日本からみるとほとんど地球の反対側に位置するチリで起きた鉱山の落盤事故で、地下何千メートルに閉じこめられた33人が無事救出された事件も、すでに遠い過去となったようだ。この事件は我々に情報とはいかなるものかを教えてくれた。生存情報を地上に伝えることができたことが、どれだけの勇気と感動と力強さの源になったか説明する必要はないだろう。

■当事者の家族など関係者のみならず、地球の反対側の我々も含めて世界中の人類をひとつにすることができた。縁も所縁もない人々までもが、救出までの日々、そして実際の救出活動の一部始終を、最後の一人が地上に生還してくる瞬間を、固唾を呑んで見守った。これぞ情報の力である。情報によって、我々人類は限りないエネルギー、パワー、そして可能性を高めることができることを、この事件で改めて知ることが出来た。

■本年度ノーベル平和賞の受賞が決まった劉曉波氏だが、その事実を国民に知らしめないようにインターネット上の情報を操作統制する中国政府。今や中国国民も世界中に旅行し、世界中から中国政府を観ることができる時代になった。にもかかわらず、これほどまでに国民を恐れる政府を自ら演出している中国政府。誠に見るに忍びがたい。逆にマイナス効果のある情報発信をしまっている。気の毒だと言わざるを得ない。

■今中国では、政府をしてこれほどまでに国民が真実を知ることが恐れる事情が発生しているのだろう。しかし情報は漏れるものである。隠そうとすればするほど、知らしめる価値は高まる。それも情報の特性のひとつである。来るべき情報社会では、人類は情報を知る義務と権利を持つ。今の中国は、情報を専有することで権力の維持をしようとしている。まさに時代に逆行している思想、考え方だと言わざるを得ない。(藤見)